第 3 回 アートインビジネス研究会 議事録

「伝統産業の源流に学ぶ－平安文化を起点として」

テーマ:上賀茂神社と葵祭

講師: 賀茂別雷神社 宮司 髙井俊光

日時:2024 年 11 月 8 日(金)18:00～

会場:同志社大学 良心館 経済学部棟 3 階第一共同研究室

第 3 回アートインビジネス研究会では、「伝統産業の源流に学ぶ－平安文化を起点として」をテーマに、賀茂別雷神社(通称:上賀茂神社)と葵祭について、205 代目宮司の髙井俊光氏が詳細に解説した。上賀茂神社は約 2600 年前の飛鳥時代に起源を持ち、京都で最も古い神社の一つであり、平安時代の景観が今も保たれていることが特徴である。本講演は、上賀茂神社の歴史的・文化的意義を多角的に紹介し、平安時代から現代までの変遷や伝統行事の詳細を解説している。特に葵祭の由来や神事の仕組み、幕末の歴史的エピソード、修復事業の苦労など、伝統産業の源流を学ぶ上で重要な内容を豊富に含んでいる。

上賀茂神社の歴史と文化的意義

賀茂別雷神社は、「山城國風土記」逸文による伝承では、2600 年前初代神武天皇の時代に賀茂別雷神は天から神山にご降臨になったのが起源と伝える。

天武天皇 6 年（677）には、天皇は山城國に命じて賀茂神宮を造営させたとの記述がある。

初代の神主（宮司）は、賀茂系図によると 997 年に「賀茂在實」という方から始まり、以降 205 代にわたり宮司職が継承されている。平安時代の著名な人物である紫式部（まひろ）や藤原道長がともに生存した時代である。

紫式部は上賀茂神社に宿泊し、明くる早朝にホトトギスの朝一番の声をお待ちになる心境を詠まれた歌が新古今和歌集に残されている。また、藤原道長も大病の後に出家し、54 歳で僧侶の仲間と上賀茂神社を訪れた記録がある。

桓武天皇は、平安遷都に先立ち 794 年に賀茂大神の大前にてその奉告をされ、同年 12 月の遷都後、桓武天皇は初めて賀茂社へ行幸し祭儀を執り行う。これ以降歴代天皇の行幸は 60 余度に及ぶ。

京都御所の紫宸殿(ししんでん)の位置決定にも関係したとされる。新しい碁盤の目の平安京の街並みを建設するにあたって、生霊悪霊といったものが、新しい都に入ってこないように、京都御所の紫宸殿の位置からみて表鬼門が上賀茂神社になるように定められた。朝廷から平安京第一の「皇城鎮護の神」として崇められた所以である。

また、鎌倉幕府が成立する以前から源頼朝による庇護と信仰を得ており、各地に広がる社領は頼朝の命令によって守られた。

このような鎌倉幕府の上賀茂神社への信仰は、後世の武家政権の規範となる。

戦国・織豊期にあっては、神社を守るため武将と交渉し多くの禁制を取得している。

織田信長は、天正 2 年（1574）5 月に賀茂競馬見学のため上賀茂神社を訪れていることが知られる。信長の参拝にあたっては特別会計が組まれ、鷹狩り用の犬の餌までもが準備されるなど周到さが伺える。

その 8 年後、信長は天正 10 年（1589）6 月 3 日に、2 回目の参拝に御成になる知らせがあり、万全の準備をするも、その前日に「本能寺の変」が勃発し、参拝の実現をみていない。

また、上賀茂神社は「本能寺の変」の翌日に明智光秀にお祝金を届けており、その数日後に明智から禁制を取得するなど、厳しい戦乱の世にあって、神社存続かけた動きが伺える。

天正 19 年（1591）7 月、豊臣秀吉から 1 万石の寄進を受け、第 29 回の式年遷宮の修復資金として行われた史実が残る。

江戸幕府を開いた徳川家康も上賀茂神社に対する信仰は厚く、以後代々の将軍から宝物器具などの寄進を受けた。

江戸時代にあって 8 度の遷宮が行われ、とりわけ寛永 5 年には幕府の寄進により江戸期最大級の式年遷宮が行われる。

文久 3 年（1963）3 月には孝明天皇の行幸があり、当時の開国といた時勢により攘夷祈願が行われている。

また、皇女和宮が徳川家に嫁ぐことが決まり、上賀茂神社へ奉告参拝にお越し頂いてい

る。その後、花嫁行列は中仙道を通って江戸へ向かわれることになるが、無事に徳川家茂のもとへ降嫁されたことのお礼の品として、兄の孝明天皇より桜の寄進あった。境内参道芝生東側にある桜で「御所桜」と名づけており、かなり老木であるが今もなお咲いており参拝者の目を楽しませてくれる。「和宮参拝日記」に当時の参拝記録が残る。

明治維新以降、国家神道の時代にあり平安時代の「延喜式」に倣って幣帛を奉る神社の格式定められ、上賀茂神社は官幣大社の首位に置かれた。

戦後、GHQ の支配化にあり神道指令によって社格制度は廃止となり、これまでの国家支援が途絶える。

これまでに行われてきた式年遷宮は、いずれも官営であったが、昭和 48 年（1973）の第 40 回からは多数の氏子崇敬者の浄財（ご寄附）により斎行した。

次回は令和 8 年 10 月に第 43 回式年遷宮を迎える。

境内は平成 5 年（1994）に国の史跡に指定され、翌年同 6 年（1995）に世界文化遺産に登録される。

葵祭（賀茂祭）の概要と伝統

賀茂祭の起源は 6 世紀中ごろまで遡ると言われている。

西暦 500 年代、時代は古墳時代から飛鳥時代へと移り変る頃で、丁度朝鮮半島の百済から仏教が日本に伝来した時代にこの葵祭の起源がある。

時の大朝廷、第 29 代欽明天皇の御代、雨風が激しく天候不順が続き作物は実らず食べ物が底をつき、加えて疫病がまん延し、その混乱を鎮めるため、賀茂の大神さまのもとへお使いを御派遣になり国家安泰の御祈願を斎行されましたところ、直ちに天候は戻り、世は豊穣と

なり、平和な日常を取り戻すこととなる。

これが賀茂祭（葵祭）の起源である。

律令時代においては、国の最も重要な恒例祭祀(中祀)に準じて行うよう朝廷からの指示があり、平安時代には勅祭として確立し国家的な祭事として行壮を整え盛大に行われるようになる。

当時の朝廷では、単にまつりと言えば「葵祭」指し、「葵祭」はまつりの代名詞であった。

南北朝・室町・安土桃山の時代おいては、応仁の乱・戦国時代など世が定まらない 200 年もの間は途絶えておりましたが、江戸初頭に復興し、明治に入り日清・日露・大東亜、途中三度の中止と復興を繰り返す。

今現在の葵祭は、戦後、ＧＨＱの進駐軍が撤退した一年後の昭和 28 年に復興したもので、またその 3 年後の昭和 31 年に斎王列が加わり、平安王朝時代さながらの行壮を取り戻し、新録の都大路を練り歩く千年の都の風物詩として現在に至っている。

起源から数えて 1500 年、悠久の時を継承し、今もなお畏き辺りより天皇陛下の御名代であるお勅使さまがご参向となり国家安泰の祈願が行われている。

日本三大勅祭であり、京都を代表する日本文化として、今上陛下の国家安泰、国民の安寧を願われる御心を賀茂大神にお届けすること、これが賀茂祭（葵祭）の意義であり、上賀茂神社にとっても大切な仕事です。